



## Contents

- 2 TOPIC トピック  
原点に戻り、厳しい局面に新風を  
- これからの市政研究所を考える -

- 4 2004 年度 **特集**  
みんなで子育てを支えよう  
座談会  
「地域と子育て」から

- 7 **開催報告**  
市政研究所セミナー  
「交通政策からのまちづくり」  
  
まちづくり講・交・考 2004  
「地域を変える市民の力」 第4回  
「都市再生 - 居心地の良い生活空間 - 」

- 8 **研究所蔵書紹介**  
「サステイナブルシティ  
EU の地域・環境政策 」



それぞれの“春”にエールをおくる満開の桜



市政研究所セミナー 「交通政策からのまちづくり」

## 原点に戻り、厳しい局面に新風を

### - これからの市政研究所を考える -

市民と市政の架け橋をめざしてスタートした豊中市政研究所は来年度、10年目を迎えます。財政の危機的状況、地方分権の進展という、かつてない環境の中で、研究所に求められる役割とは何でしょうか。

法政大学地域研究センターで自治体シンクタンクのあり方を研究されている牧瀬稔さんと、市派遣研究員の第1期生で、市の市民活動課課長補佐・本荘泰司さんのお2人に寄稿いただきました。「時代の波にのみ込まれることなく、設立の原点に戻って、所期の使命を果たそう」という力強いメッセージをみなさんにもご紹介します。

#### 豊中市政研究所のこれからは、 自治体シンクタンクのこれから

牧瀬 稔

##### 漂流する地方自治体

今日、地方分権の大波が多くの地方自治体（以下「自治体」とする）をのみ込もうとしている。一部の自治体は大波を乗り越りつつあるが、多くの自治体は漂流し、さまよっている。そんな中、大波を乗り越る一手段として、相次いで自治体シンクタンクが誕生している。豊中市政研究所（以下「TIMR」とする）も、その自治体シンクタンクの一つである。

本稿では、TIMRの今後の方向性を、時代の流れの中で私見を交えて描いてみたい。

##### 自治体シンクタンクの原点に戻る必要性

TIMRは今、地方分権の波にのみ込まれようとしている（まだのみ込まれていない点がポイント）。荒波にもまれて、その存在意義が「ぶれて」きてはいないか。

一般に企業経営では、進む方向が分からなくなった場合、「企業理念に戻るべし」とされる。TIMRも原点の理念に戻れば、取るべき

針路も必然と明らかになる。そして、その原点は設立趣意書の中に見られる。そこには、「豊中市政の長期展望や各種の政策目標を提示していく市民に開かれた調査研究機関」とある。これがTIMRのDNAなのである。

地方分権の大波（この大波を筆者は自治体間のM&Aを内包した弱肉強食の都市間競争と捉えている）の中、TIMRが「キラリ」と光る存在であり続けるには、この設立趣意書という原点に戻れるか否かにかかっている。

##### ■任意団体であることの強み

次にTIMRの強みと特長について考えたい。それは、多くの自治体シンクタンクが自治体内部に（一つの「課」として）設置されたり、財団法人の形態をとったりしているのに対し、TIMRが「任意団体」という点にある。

一般的に任意団体は法人格がないため、団体名で契約したり財産を所有したりすることはできず、さらに信頼性に欠ける点がデメリットとして指摘されている。しかし、TIMRは豊中市役所が設立した機関で、この「信頼性」は担保されている。

ところで、現在のTIMRがこの任意団体と

いう特長を、最大限に発揮しているかとなると疑問が残る。市の組織ではなく任意団体であるからこそ、できることが多々ある。職員のフレックスタイム（島根県平田市などで実施）や在宅勤務、外部からの研究費獲得などがその例といえよう。また、市政を第三者的視点から客観的に判断することも可能となる。そうした利点を最も効率的に生かしてこそ、設立趣意書を体現することになるのである。

## おわりに

TIMR の未来を明るくするのも、暗くするのも、「今」にかかっている。設立趣意書という原点に戻り、自らが持つ強みを最大限に発揮してほしい。TIMR は自治体シンクタンクの老舗になりつつある。多くの自治体シンクタンクの「よいモデル」として、第二の発展期を迎えられることを願っている。（なお、ご意見等は直接、mmakise@nifty.com まで）。

## 「外郭団体等のあり方の検討」を検討する

本荘 泰司

### あり方検討の背景と行政責任

市は昨年 11 月、当面の準用財政再建団体転落の危機を回避するため、行財政再建指針・計画※<sub>1</sub>を発表した。計画期間中に取り組むべき課題は 152 項目にのぼり、市出資団体（外郭団体）の経営改善も幾つか含まれ、概ね 3 年間で新たな方向付けを行う必要がある。

これまで市出資団体は、自主事業に加え、行政からの補助金や委託料で「上のせ・横だし」事業を実施し、行政の補完的機能を果たしてきた。しかし、市の財政状況の悪化で、緊急避難的に補助金等のシーリング・カットが繰り返し行われた結果、団体は疲弊化し、事業の継続はもとより、運営そのものが困難な状況になっている。今回の検討でも、出資者の行政責任のもと、団体運営や経営にゼロベースからの検討・評価※<sub>2</sub>が求められている。

### ■「市政研究所のあり方の検討」の視点

- 評価にあたって何をうりにするのか？ -

それでは、「市政研究所のあり方の検討」は、具体的にどのような視点で進められるべきか。詳細は、市と理事会で協議される事項だが、基礎自治体が有する調査研究機関の意義や目的、事業効果等に関する評価軸を用意しながら進めていく必要があると思われる。

ここで、改めて「豊中市政研究所規約」をみると、①豊中→地域性の追求（規約第 3 条）、②調査研究（同）、③政策提言（同第 4 条）とある。したがって、研究所の役割は、「市民生活に密着した極めて現場性を重視した調査（地域調査力）と、そこでの問題点を丹念に整理しながら、行政職員や市民、研究者とのネットワークで、課題解決のための代替案づくり（政策提言力）」だといえよう。この過程から産出されるのが、市の公共政策の種（代替案）であり、これら一連の活動が団体のうりとなる。

このうりを研かず、表層的なコンサルタンの業務に終始するのであれば、民間コンサルタントと何ら変わりはなく、研究所の存在意義そのものが問われかねない。設立 10 年を目の前にした研究所の「あり方の検討」をめぐっては、まず、団体設立時の目的（使命）に立ち返った上で評価軸を設定し、今日的な検討が求められるべきではないだろうか。

危機に直面し、閉塞感漂う市行政の「政策の窓」を、こじ開けるような調査研究を期待している。

※1 もっとも計画では、市政研究所が「1-(2)政策目標に基づく施策の選択と集中」に位置付けられているのに対し、他の団体は「3-(5)公営企業、外郭団体の経営健全化」の項目となっており、両者の検討の視点はかなり異なってくると思われる。

※2 先行事例としては、既に都道府県や政令指定都市が「第三セクターに関する指針」（平成 11 年自治省）をもとに、団体の経営効率に比重をおいた作業に着手している。団体の評価がマイナスのベクトルを進むと、最終的に組織の統廃合に至るのが一般的である。

2004年度

特集

# みんなで子育てを支えよう

時代の変化を映し、社会問題化している今日の子育て。その現状や課題、望ましい方策を考えようと2月21日、研究所内で座談会「地域と子育て」を開きました。子育て中の母親・西泉丘の亀野朋子さん、市の子育て支援センター「ほっぺ」の長谷川真知子所長、高川保育所の大和敬吉保育士が参加し、白岩正三研究員の司会で活発に意見を交わしました。今年度の特集のまとめとして、その概要をお伝えします。

## 親と子に望ましい支援とは…座談会で意見交換

### 何が変わったのか

**白岩** 一昔前と比べて“子育て”が変わった、難しくなった、とよく言われます。自己紹介を兼ねて、何が変わったと思われるか、お伺いしたいと思います。

**亀野** 夫の仕事を手伝いながら、中学2年生から保育所に通う5歳児までの4人と奮闘中です。子育てを取り巻く環境の変化もあるでしょうが、一番変わったのは「私自身」かな、と。1人目の時は不安やあせりばかりでしたが、4人目になると育児が楽しく余裕が持てました。幸いにも恵まれた4人の子どもたちにより、子育ての楽しさを知り、未熟ながらも「親」として成長させられているように思います。

**大和** 保育歴13年で、育児休暇も取得しました。以前と比べ、個人の人権感覚が鋭くなり、はっきり要望を言われる保護者が増えた一方、子育てのストレスを苦情として、保育所に持ち込まれる方もおられます。それと本来、親や友達を見て育つ幼児が、テレビキャラクターのパンチやキックを見て育っていないか、長時間視聴で乳児の脳に悪影響がないかなど、



メディア過多時代の問題を感じます。

**長谷川** 保育所勤務のあと、「ほっぺ」で2年



が経過します。相談内容は第1子ですと「寝返りを打たないが…」「言葉が遅いのでは…」といった育ちの段階での戸惑いや不安感を訴えるものが多く、第2子以降では兄弟

姉妹関係が主流になります。件数も年毎に増えて、情報過多の影響か「Aの人はああ言い、Bの人はこう言い、Cの人は別のことを言っている。どれが本当か」といった質問がよく寄せられるのも最近の特徴です。

**大和** 産まれる前は夢を膨らませていたのに、いざ産んでみると、“こんなはずではなかった”と、落差の大きさに戸惑い、自信をなくす親が増えているように感じますね。

**亀野** 以前は子育て経験の豊富なおばあちゃんがアドバイスしてくれていたように思います。しかし今は、そんな頼れる人が減ってしまい、「ほっぺ」への相談が増えているのではないのでしょうか。

### 居場所を求める親子

**長谷川** 相談を受けていて痛切に感じるのは、今の親子が有り余る情報の中で閉塞された状況に置かれているということです。家の中で

子どもと向き合っているのが息苦しくなり、近くの公園にでもと思っても、そこには以前のように子どもたちの遊ぶ姿は見られません。そんな母子の幾組かが「ほっぺ」を訪れています。一度訪れると、ほとんどの方が雨降りでも、遠くからでも来所されます。「家にいるよりも、この方が楽だから」と。やっと行き場が、居場所が見つかったという感じです。そして子育てに自信を得た母親が2人目、3人目を産むというケースもみられます。

**亀野** 社会活動していた女性が妊娠・出産で家庭に入り突然、育児とだけ向き合うようになった時の閉塞感はよく分かります。それだけに、母親同士が出会え、気分転換できる場所は必要ですね。現実には無理でしょうが、そのような施設が家から10分ぐらいの所に、たくさんあればいいと思います。

**大和** 公的施設ではないですが、地域の自主的な子育てでサークルに入る人も多いですね。親同士の人間関係が生まれ、その出会いが親の育ちを促し、子どもにもいい影響を与えています。こうしたサークルに入っていない人の中には、保育所の行事予定を調べ、幾つかの保育所を「はしご」される方もおられます。

## 地域とのつながりは

**白岩** 子育てサークルには活発に活動しているものが多く、母と子の両方に好影響を与えているようですね。その反面、「ほっぺ」にもサークルにも保育所にも出て行けない親子が増えている実態も無視できません。そのため、



地域ぐるみの子育て支援システムの確立が、行政施策として望まれています。この点はいかがでしょう。

**長谷川** 支援システムには、施設と親子をつなぐキーパーソンが不可欠です。それと、育児ノウハウを有し、家庭と家庭の接点や出会

いの場となれる保育所が今後、地域の子育ての核になっていくのが自然かもしれません。

**亀野** 地域とのつながりを一番欲しているのは、実は母親です。父親はどうしても仕事優先になりがちですから。母親にはわが子の育ちが正確には判断できないところがあり、第3者から言われて初めて気づくことが多く、その意味でも、地域に即した子育て支援システムは不可欠だと思います。昔は自治会、子ども会がそのへんをフォローしていたのですが、今は加入しない人も増えています。地域での人間関係の希薄化は、避けがたい現実ですね。

**長谷川** どこにも出て来られない人の中には、子どもに障害があるというケースもあります。母親同士がつながり、分かり合えば、その子のことも自然と理解できてくるのですが、今の母親を見ていると、自分から進んで人間関係を結ぶことに、戸惑いを感じている様子が伺えます。

**亀野** 第1子が幼稚園や学校に行く前の母親たちはコミュニケーションをとれる場が少なく、ますます孤立してしまうことが多いのではないのでしょうか。子どもが幼稚園や学校に行くようになれば、親同士のつながりが生まれ、地域との触れ合いも増えます。それなら、少しでも早くと思うのですが、なかなかそうはいかないようです。

**大和** 保育所で言えば、以前は世話役を買って出てくれる人がいて、保護者間をうまくまとめてくれましたが、今はそういう人も少なくなりました。保育所を離れた場では、妊婦教室やスイミングスクール、出産のため同じ病院に入院して知り合った人たちの母親の会があるようですね。しかし、個々の輪、サークルを束ねる存在がありません。出て来られない親子の問題でも、地域全体に目配りできる人がおられたらと思いますし、それが無理なら、せめて保育所には来てもらえるよう、呼びかけなければと痛感しています。



## 望まれる行政施策とは

**白 岩** 現代の子育てには、家庭・地域が担えなくなった機能を、行政が補っている側面があります。中学校区を単位とした「地域教育協議会（すこやかネット）」や、小学校区を単位とした「地域子ども教室」などの取り組みにもその反映がみられます。そうした点を踏まえ、望まれる行政支援とは何でしょうか。

**長谷川** 土曜日に地域の料理教室が開かれています。子どもに行ってきたさいと言って、一緒に連れだつて来られる親は多くありません。「すこやかネット」「地域子ども教室」とも、子どもの参加はあっても、親の参加が少ないというのが共通した悩みだそうです。子どもは親を見て育つのですから、親も一緒に参加できるような工夫や、そのための支援が欠かせないと思います。

**大 和** 沖縄の祭りや岸和田の祭りを見ると、親が非常に盛り上がっています。あのように親が盛り上がりなければ、子も盛り上がりようがありません。大人が楽しそうにしているこそ、自然に子どもも寄ってきて、そこで育っていくのに、と残念に思います。

**亀 野** 確かに、親にそうした動きがないと、子どもは寂しいですよ。

**大 和** いきなり沖縄や岸和田までいかなくとも、親子で楽しめる仕組みづくりを心がけること、これは行政の務めでしょう。それに忘れてならないのは、そこから落ちこぼれる親子がないように、細かい網の目のようなネットワークを構築することだと思います。

**長谷川** 具体的にどんな施策を、と聞かれると難しいのですが、子育てに携わっている者として、地域で生まれた子は地域で育ててほしいという思いがあります。そうした点から、市社会福祉協議会の校区福祉委員会が運営している「子育てサロン」に注目しています。このサロンは、地域の乳幼児と親が気軽に集える居場所づくりをめざしたものです。現在27の小学校区に開設されていますが、これが

充実すれば、今まで話し合ってきた課題の多くも解決するのでは、と期待しています。

**大 和** 豊中駅前の「すてっぷ」が進めている父と子が『一緒に遊ぶ』『絵本を読む』試みなんかも、面白いですね。男性の育児参加という面でも、今後充実させてほしい施策です。



和やかに「子育て」を語り合う出席者

## それぞれの役割と連携

**白 岩** これまでのお話の中で、家庭・地域・行政それぞれの役割が、かなり見えてきたと思います。例えば、長時間テレビを見させないといった基本的な生活習慣、父親の育児参加、多くの親と触れ合い、自分自身を成長させることなどは、家庭の課題といえるでしょう。今日の座談会の中心テーマ、地域の役割では、親とサークル、サークルと施設のつなぎ役、コーディネーターとも呼べ、キーパーソンともいえる人の確保、一人も漏らさないきめ細かなネットワークの構築、子どもの成長とともに身近になる地域コミュニティの大切さなどが指摘されました。また、大人と子どもが一緒に楽しめる仕組みづくり、「子育てサロン」「地域子ども教室」のような居場所づくり、地域拠点としての保育所の活用、地域の特性に応じた支援システムの確立などは、行政の課題といえるでしょう。しかし、それらの課題に対処していくには、いずれも単独では限界があり、家庭・地域・行政の連携が欠かせないことを、最後に確認しておきたいと思います。ありがとうございました。

## 開催報告

## 市政研究所セミナー 「交通政策からのまちづくり」

【と き】2005年2月22日(火) 15時～17時

【と ころ】豊中市役所第二庁舎3階 会議室

【内 容】研究報告「都市交通から見た政策課題の考察」(土井博司・豊中市政研究所研究員)  
 関連報告「フランスの自治制度と総合交通政策」(板谷和也・東京大学大学院生)



報告する土井研究員(右)と板谷さん

はじめに土井研究員から、最近自動車利用の増加によってまちの危険性が高まっている状況が報告されました。そして、自治体として自動車から市民の安全を守る地域交通のあり方を定める必要性と、そのあり方を定めることを目的とした「(仮称)交通基本条例」の試案が提示されました。

続いて板谷さんからは、フランスの交通政策における地方自治体の役割と、オルレアン地方の事例についての報告がありました。フランス国内では1982年に国内交通基本法が制定

され、地域交通政策の主体は地方自治体となり、交通税を徴収して、交通基盤整備や公共交通機関の運営にあてている、との主旨でした。引き続き、日本における自治体の現状とフランスの自治体が行う交通施策との違いが、参加者との意見交換で活発に議論されました。

## 開催報告

## まちづくり講・交・考 2004 「地域を変える市民の力」第4回

## 「都市再生－居心地の良い生活空間－」

講 師：岡部明子 (建築家・千葉大学助教授)

【と き】2005年3月8日(火) 14時～16時

【と ころ】豊中市立中央公民館3階 視聴覚室

【内 容】これまで研究所の理事が講師となり、市民主体のまちづくりを市民とともに考え、交流を深めてきた「まちづくり講・交・考」。



4回目となる今回は、ヨーロッパの都市再生に造詣の深い岡部さんをお迎えして、EU地域での事例を中心に「くらしから都市の再生を考える」視点についてお話しいただきました。その中で岡部さんは、多様な人々がつながりながら暮らす「まちなか」形成の重要性を分かりやすく説明。日本のまちづくりの顕著な特徴として、公共空間の造成などハード面と、まちづくり制度の確立などソフト面がつながっていない点を指摘されました。そして地域活性化の源は、公共空間と人々のパワーの相互作用にこそあると説かれ、話を結ばれました。

## 〈参加者の声から〉

- ・まちをどう再生していくか考える際に、参考になるヒントをたくさんいただいた。
- ・市民参加に対するもやもやした思いが、先生のお話で少しクリアになった気がする。
- ・バルセロナの具体的な都市再生手法を伺い、市民主体の考え方が「なるほど」と感じられた。
- ・時間が短くて、質疑が十分行えなかったのは残念。

## 市政研究所

## 蔵書紹介

『サステイナブルシティ EUの地域・環境政策』

〔著者：岡部明子 発行所：学芸出版社 価格：2200円〕

本書のタイトルにある「サステイナブル」（持続可能の意）－1992年リオの地球サミットで一躍注目を浴びることとなったこの言葉には、経済の発展と環境保全を両立させようのではと思わせる不思議な力がある。この「サステイナブル」の理念に基づいた、EU地域の都市再生政策が本書のテーマである。

冒頭部分で著者は、サステイナブルな都市再生の成功例としてスペインのビルバオと北九州（八幡）を挙げている。いずれもかつては製鉄のまちとして栄え、鉄鋼業の衰退とともに疲弊の一途をたどるという共通の背景を持っていた。だが、都市再生に向け両者が取ったアプローチは、全く違う。北九州では、鉄鋼業で培ったストックをリサイクル工業へシフトさせていく「エコタウン構想」がその核にあり、ビルバオでは美術館誘致など、社会・文化政策がその中心に据えられていた。この例に顕著なように、日本では、「サステイナブル＝自然環境の持続」というイメージが強い。他方、EUの都市政策における「サステイナブル」には、環境・経済・社会の各側面が包摂されており、その根底には、「人が集い、住み続けられるまちを取り戻したい」という切実な思いが貫かれている。

さらに本書は、都市とその周辺にある農村地域を一体のものとみなし、いくつもの都市をつなげて地域の活性化を図る「シティ・リージョン」の事例を紹介。国家の枠にとらわれず、既存の政策を横断する形で、都市のネットワークとしてヨーロッパを再編成していく取り組みについて検証している。また、東京を中心とした地域への、この取り組みの応用可能性についても言及していて興味深い。

「あとがき」で著者が明言しているように、本書は、都市の「サステイナブル度」を向上させるための特効薬でも、マニュアルでもない。しかし、都市という空間を、新たな視点で捉えていくためのヒントが随所に見られる。私たちが暮らすまちの、私たちの「サステイナブル」をどう築いていくか。この問いに答えるための道標として、常に心に留めておきたい一冊である。（中村恵子）

## 編集後記

▶旅立ちの春には桜がよく似合います。ここからほど近い豊島公園も開花間近です。27号をお届けします ▶年度特集の最終回は座談会「地域と子育て」。育児力の低下が懸念される昨今、家庭・地域・行政の役割分担と連携の道筋を話し合ってくださいました ▶トピックは「これからの市政研究所」。寄稿いただいたお2人から期せずして“原点に戻れ”とのご指摘。理事会を中心に、論議を深めたく思います ▶4月には事務局も半数が入れ替わり、新体制に移行します。引き続きご支援くださいますよう。1年間ありがとうございました。深謝。（奥田八重子）